

農産物ブランド化 調理法など冊子に

長門で成長戦略検討会議始まる



農産物のテキスト化の重要性などについて理解を深めた会合＝22日、長門市

も期待できる」と述べた。

テキスト化の際は地域の女性を巻き込んだ食のワークショップを開くことが重要と指摘。実際に食材を見て食べることで地域の豊かさを再認識し、農家の女性の起業促進や商品開発のきっかけづくりにもつながると紹介した。

テキスト化を目指す品目のうち、この日は秋まきげなすと白オクラの案が示された。内田委員長と金丸委員は、両野菜が長年自家採種により栽培が続いている点に着目。自家採種をもっと積極的にPRしていくほか、農薬や化学肥料の削減を現行の30%から50%にステップアップし商品の強みにすることなどをアドバイスした。

農業部会では近く食のワークショップを開催し、今年度中のテキスト作成を目指す。23日は水産部会が開かれ、アジやケンサキイカなどのテキスト化に関する研修が行われる。

長門市のながと成長戦略検討会議（委員長・内田恭彦山口大経済学部教授）の本年度第1回会合が22日、市内で始まった。同日は農業部会が開かれ、農産物のブランド化に向け、高付加価値を付けるために必要な食材の歴史や栽培履歴、調理方法などを冊子にまとめるテキスト化の重要性について認識を深めた。

食環境ジャーナリストで同会議の金丸弘美委員が、茨城県常陸太田市のそば、兵庫県豊岡市のコウノトリ米などブランド化の成功事例を説明。「独自商品として他との差別化を明確に示すためにも、農産品のテキスト化は必須。冊子はバイヤーと農家をつなぐ営業ツールにもなり、現地見学ツアーなど観光産業への展開